

[090] 語文研究表紙奥付等

<http://hdl.handle.net/2324/10176>

出版情報：語文研究. 90, 2000-12-26. 九州大学国語国文学会
バージョン：published
権利関係：



《會員著書紹介》

山口康子著

『今昔物語集の文章研究』

—書きとめられた「ものがたり」—

先頃長崎大学を退官した著者は、長年に亘り『今昔物語集』の文章をめぐる研究を推し進めてきた。本書は、その成果である論文三三篇を中心にとまとめられている。章立は次の通りである。

序章 文章研究の立場と方法

第一章 文章研究の手がかりを求めて

第二章 今昔物語集の用語

第三章 今昔物語集の修辭法

第四章 今昔物語集の文章の構造

終章 今昔物語集の文章の性格

序章に、現存最大最高の説話集とされる『今昔物語集』千余話を文章史的に検討するという本書の基本的な立場を述べ、検討の主な単位として語・文・文章の三つのレベルを挙げる。第一〜四章はその具体的な実践で、第一章では文・文章、第二章では語、第三章では語・文、第四章では文章が検討される。さらに終章にまとめが行われ、全体の結論が示されるが、一貫しているのは本書表題にもある様に、伝承さ

れてきた「ものがたり」を文字化し「書きとめる」という行為の意味を丹念に問い続ける態度であって、そこから導かれる考察のポイント（特に、スナハチ・イノルなど個々の語史、「タダナキニナク」など同一動詞反復形式、また何より引用文形式、ひいては一説話の基底をなすとされる「引用構造」）には必然性が認められる。

また、いわゆる原拠説話や他の説話集、中世の全期に及ぶ文学作品、その上『古事記』や平安女流文学にも必要に応じて検討が加えられ、多角的な分析が実現している。語学はもとより、文学的視点からの『今昔』研究にも新たな指針となる一書であろう。

なお、全編を通じて豊富に図表が挿入されており、理解を助けるものとなっている。

（平成十二年三月 おうふう A5判 七九三頁 二八、〇〇〇円）

多治比郁夫・中野三敏 校注

新日本古典文学大系97

『当代江戸百化物』

在津紀事
仮名世説

人間に対する興味の高まりを象徴するが如く、近世においては人物の逸話・逸聞といったものを書き留め又それを喜ん

で読むような風潮が急激に加速した。これらの内あるものは刊行され、あるものは写本のまま流布して大いに評判を得ることになるが、本書には、その中から近世中・後期のものを中心に収める。収録作品は表題三作の他、『蓬左狂者伝』『落栗物語』『逢原紀聞』『泊筆話』の全七点（『逢原紀聞』は九州大学附属図書館荻野文庫蔵本、『仮名世説』は中野三敏氏架蔵本を底本とする）。上は当代一流と称される学者・文人の逸話・逸聞から下は市井の俗人を対象とする巷説・街談まで、その内容は変化に富む。又これらの随筆や逸話・逸聞の類は本来表立った著述ではないだけに、その人物の本音を如実に窺い知ることができ、それ故、「江戸」を身近に感じ得る格好の素材である。

これら近世の随筆、逸話・逸聞の類を総括して幸田露伴は「圏外文学」と称したが、これは従来の近世文学史が当分野を「文学」に非ずとして放擲してきた事に対する批判とも受け取れる。それを受けて中村幸彦氏は「圏外文学」に対する積極的な提言を行ってきたのだが、今回、新日本古典文学大系の一冊として以上の七点が詳細な注と人物索引を伴って収められたことは、当分野の研究に先鞭を示したものといえる。今後、「圏外文学」を包括した近世文学史の再構築が待たれる。

（平成十二年五月 岩波書店 A5判 四三七／二二頁 四、二〇〇円）

後藤康文著

『伊勢物語誤写誤読考』

本書は、著者の既発表の十五編の論文と、書き下ろし三編とを一書に纏めた論文集である。今日、『伊勢物語』は、藤原定家筆の天福本（三条西家旧蔵学習院大学蔵本）で読まれるのが一般であるが、本書は、その天福本『伊勢物語』の本文を問題とする。善本の本文を尊重するのは解説の基本ではあるものの、それを護持するばかりでは解決しない問題が少なくない。著者はそこに定家本文そのものに潜在する誤写の可能性を指摘し、古注から現代注に至る膨大な『伊勢物語』諸注の整理・批判と、多岐に渡る資料からの用例の収集という二つの基本姿勢のもとに本文改訂を提案する。前編はこうした誤写に纏わる各論を収める。後編は、「誤読」の氾濫している『伊勢物語』の現状を、注釈者の先入観や恠性、怠慢に起因すると批判して、一語一語の語義語法を吟味し、新しい解釈、正しい解釈を引き出す。内容は次の通り。

前編『伊勢物語』誤写考

第一章 「憂し」と「惜し」（第六十七段）／第二章 「この宮に」と「この屋見に」（第五十八段）／第三章 「山もさらに」と「山ことさらに」（第七十七段）／第四章 「なで」と「なん」（第十四段）／第五章 「なりての世に」と「なりてのちに」（第五十五段）／第六章

「友だちどもに」と「友だちのもとに」(第十一一段) / 第七章 「見出づ」と「し出づ」(第四十一一段) / 第八章 「本意なし」と「甥なり」(第三十九一段) / 第九章 「あだくらべ」と「忍び歩き」(第五十一段)

後編『伊勢物語』誤読考

第一章 解釈の〈絶対領域〉と〈相對領域〉(第二十六段) / 第二章 「さるさがなきえびす心」(第十五段) / 第三章 「かはづ」の寓意(第二十七段・第百八段) / 第四章 伏せられた文脈(第十八段) / 第五章 「伊勢の国に率て行きてあらむ」(第七十五段) / 第六章 「紅葉も花もともにこそ散れ」(第九十四段) / 第七章 「くらべこしふりわけ髪」(第二十三段) / 第八章 「かの」の謎解き(第二段) / 第九章 隠された構成原理(第五十九段)

(平成十二年五月 笠間書院 A5判 三二七/一四頁 八、五〇〇円)

鈴木広光他著・印刷史研究会編

『本と活字の歴史事典』

本書は、明治中期までの金属活字の歴史を、それぞれの専門家が新しい資料を駆使し、新しい視点で詳述したものであ

る。近年の活字史研究の集大成ともいえる書であろう。

活字書体はその国の文字を様式化・定型化したもので、その使用範囲は自国に限られる。しかしそれが「国際的環境の中での活字書体」であることを忘れてはならない。活字書体はその国の文化・精神・技術を表現する以上、他国との関係も視野に入れておかねばならないはずである。

本書の第一章・第二章では、「きりしたん版」「駿河版」がヨーロッパの影響下にあった、という従来とは異なる説を提唱する。そして第三章以降では、十九世紀漢字活字の開発史は、ヨーロッパにおける東洋学・日本学の発達とアジア諸国特に中国へのキリスト教伝道活動を両輪とし、欧米人によって漢字活字が開発されたことを精緻に実証し、その行き着いた国が「東の地の極まる」ところ」日本であったことを論証している。このようなアプローチによる漢字活字研究は類例がない。その意味において、本書は活字史のターニングポイントとなるものであり、後学への示唆に富んでいる。

目次と著者は以下の通り。

第一章 きりしたん版について(大内田貞郎)

第二章 駿河版銅活字 その成立と鑄造技法の解析(百瀬 宏)

第三章 ヨーロッパ人による漢字活字の開発 その歴史と背景(鈴木広光)

第四章 明朝体、日本への伝播と改刻(小宮山博史)

第五章 幕末の洋書印刷物 活字による見分け方 (高野彰)

第六章 和文鑄造活字の「傍流」(府川充男)

(平成十二年六月 柏書房 B5版 五〇九頁 九、五〇〇
円)

田中道雄著

『蕉風復興運動と蕪村』

本書は、十八世紀後半の俳諧の潮流を、特に蕪村に焦点を合せて捉えた、著者のこれまでの研究成果を一書としたものである。目次は以下の通り。

- 一 蕉風復興運動の二潮流―運動の基本構造―
- 二 蝶夢を扶けた人々―運動の地方的基盤―
- 三 郊外散策の流行―新しい場としての自然―
- 四 拾い子と蕉門俳諧―共通理念としての「情」―
- 五 「我」の情の承認―三元的な主客の生成―
- 六 「世」に対する「我」―麦水の自我意識―
- 七 「思いやる心」(想像)の発達―三元的な主客の合一―
- 八 春帖に見る夜半亭一門の文芸的変容
- 九 蕪村一派と地方系蕉門の交流―とくに樽良をめぐる―
- 十 蕪村の手法の特性―「趣向の料としての実情」―

本書の基本的姿勢は書名そのものに端的に示されており、「はじめに」で更に詳述されている。即ち、地方系蕉門の傍流の俳人達によって始まり、「芭蕉へ帰れ」を合い言葉とした地方系と都市系の二つの流れの融合という形を取った安永・天明期の一大俳諧革新運動と、その精髓としての蕪村という捉え方である。蕪村は言うまでもなく俳諧史を語る上で欠かせない俳人であるが、決して他と隔絶した存在ではなく、あくまでもその時代を生きその時代を体現した作者であるという、至極当たり前な、しかしやもすると忘れがちな事実を改めて認識させられる。

またこうした文学運動を論じる際に、ともすれば事象そのものを語ることに力点が置かれ、その内実に対する踏み込みが不足する場合があるが、本書では近世の経済史・思想史をも視座に入れた上で、この蕉風復興運動の文学理念を、対象を「思いやる」心―対象に対して一体化する程の深い「情」と見定めている。こうした理念は、運動における事象の一つ一つや蕪村について考える時に、より深い理解を得るために欠かせない要素と言えよう。

(平成十二年七月 岩波書店 A5版 三九〇頁 九、六〇〇円)